

序

千葉大学長

香月秀雄

一つの新しい組織機構が計画され、着手され、そしてそれが成育して行く過程には、膨大な力が消費され、そして時間という因子が介在する。

新制千葉大学が発足し歩いてきたこの30年の歴史の中にもどれ程多くの人達の努力が注がれてきたか、それは計算することも出来ない程の量と質をもち、更に入魂の難行を伴っていたものである。しかし30年前に、出発すべき新しい大学としての機構はどのように計画され、そして将来の展望は如何様に画かれていたのであろうか。

幾つかの、広い意味での高等教育機関ともいうべき組織を合体させることにより、旧制度下にあった総合大学の複製を意図していたものであったのか、或は、全く新しい理念の下に大学の理想像を求めて計画されていたのであろうか。

古いものは、その存在の理由を古きが故にもつものでなく、それが組織体である場合、それが機能するために変貌を加え、逐時これに加えられるもの、或は反面捨て去られていったもの、その生成、同化と異化の相克の歴史の中に自体の存在の評価を受けなければならないのである。

機構・組織が徒に膨脹し、その目的とする大学としての機能が、意図しているものと異った道を歩み始めているかに見えた旧制度下の大学は、当時既に総合大学というより複合大学の様相を呈していたようである。

勿論、複合大学とも称せられる機構も、またそれはそれなりの独自の意味を持ち、一概にこれを排除すべきではなく、現在の日本に於てはその利点について改めて考えなければならない問題を抱えている。

しかし、新制大学が発足した30年前には、少なくとも大学が学術の中心として、広く知識を授けるための機能を維持するものとして考えられ、組織の膨大化に伴う様々な弊害への反省がこめられていたことであろうし、また教育・研究の両面から片寄りの無い展開を大学の場に期待し、同時に高等教育全般の普及、質の向上を意図していたものと考えられる。

昭和の戦乱の直後に敗戦に打ちひしがれた国民の意欲が学問への指向、高等教育の

整備、充実に注がれたことは、明治の夜明けに開かれた初等教育の普及に次いで、わが国の教育改革に向けて第二の新時代の到来であったとも言える。

高等教育の普及という社会的要請は、国家の存続、繁栄という大きな問題を、国家の孤立化を防ぎながら世界の連帯の上に成立させることに向けられたものである。

しかし連帯ということは寄りかかることではなく、それぞれが応分の自主能力を備えたものという前提の上に成立することを忘れてはならないのである。その意味からも大学が、世界の連帯の中にある国家としての誇りを維持するための学術・研究の中心であることが最小限の設置理念と考えなければならないのである。

さて千葉大学の歴史を30年史の過去にさかのぼってみることは、一人千葉大学のみならず、同時に発足した多くの新制大学の生々流転の歴史をふり返ることであり、そこに居て、そこを去っていった多くの人達の遍歴と回帰の想いでもある。そしていま30年の歴史の上に位置づけられた本学をこれからどのような考え方の上に熟成させてゆくかが、この大学に職を奉ずる者、ここで学ぶ者、そしてこれを取り巻く多くの機構とそれを構成する人達の責務として大きくのしかかっているのである。

地理的に千葉県は、地方的な面と首都圏的な両面をもっている。地方自治を強調し首都圏の立場から分離し孤立することも出来ず、反面、首都圏に埋没し、動きの全てがこれに左右されることも避けねばならない。

千葉大学の位置づけも必然的にこれに似た意味をもち、地方大学としてその地域の機能に寄与する立場に置かれる反面、首都圏大学として、全国の少なくとも国立大学の連合機能に直接参画する立場に置かれ、これに応じうる内容と力を持たねばならないと考える。その為には、少なからぬ山をわれわれは、これから越えて行くことになるろう。

焦らず、急がず、止ることなしに、千葉大学を大学たらしめる為の着実な歩みをわれわれはすすめて行きたい。

終りに、本30年史を編纂するに当たり、全学の教官・職員の方々の絶大な御協力はもとより、既に学外に去られた多くの教官・職員の方々の温情溢れる御尽力により、貴重な資料の収集を得る事の出来たことを心に沁みて有難く感じている。

尚、白田貴郎教授を委員長とする編纂委員会・専門委員会の方々、これを支えた事務局の諸君の長い期間に亘る御苦勞と熱意は、この30年史と共に脈々として後に続く千葉大学の人々の心の中に生き続けることと思う。ここに深甚の謝意を表するものである。